

氏名	村 田 正 博
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第3512号
学位授与年月日	平成10年12月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学 位 論 文 名	萬葉集の歌人と表現
論文審査委員	主 査 教 授 増田 繁夫 副主査 教 授 毛利 正守 副主査 教 授 栄原永遠男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は万葉集の主要歌人の歌につき、その用語・用字・語句・文脈などの表現方法を考察して、各歌人の個としての特徴の解明と共に、和歌史的な定位をめざしている。全体は以下の三章から成る。

第一章「初期萬葉の歌人と表現」は、柿本人麻呂以前の歌と歌人を考察したものである。

第一節「歌謡から創作の詩歌へ」は、共同体の歌謡の段階から個人の創作の歌（文学）が宮廷を中心に発達してゆく様相を、雄略天皇の求婚歌と舒明天皇の国見歌の分析を通じて考察したものである。

第二節「初期萬葉歌の射程」は、額田王・井戸王・有間皇子らの歌が、古代的な歌謡性を抜け出て、個人の抒情の歌になり得ていることを論じている。

第三節「深遠の報贈」は、藤原鎌足と鏡王女の贈答歌の読解を通じて、この歌が鎌足の人間性を深く表現し、既に明確に歌謡から文学へと踏み込んだ成熟した創作の歌になっていることを論じている。

第四節「久米禅師の妻問い」は、久米禅師の妻問歌に残存する歌謡性と、それを出て文学的なものを志向するあり方や、物語的なものへの関心を指摘して、近江朝和歌の一側面を考察したものである。

第二章「盛期萬葉の歌人と表現」は、人麻呂の歌を万葉最高の達成とする立場からの諸論である。

第一節「人麻呂の作歌精神」は、人麻呂の関係する歌に特徴的な用字法、自己を表す語の「ワレ」を「吾等」と表記することを手がかりに、そこに宮廷歌人とされる人麻呂の作歌の基本姿勢を見たものである。人麻呂の歌は、宮廷歌人として要請される官人の立場と、作家としての人麻呂の個の立場との緊張関係の中で、両者の「共感の世界」を形成しようとしている、という結論を導き出している。

第二節「人麻呂の技法」は、人麻呂の近江荒都歌における「そらにみつ」と「いはばしる」の枕詞の用法の考察を通じて、この長歌の構造や主題とともに、人麻呂の作歌技法を論じたものである。

第三節「人麻呂の慟哭」は、高市皇子挽歌を論じて、この挽歌の現形成立までに三段階の過程が認められ、その各過程で推敲が加えられて、この作品が完成度の高いものになったことを論じている。

第四節「〈柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首〉の形成」は、八首のもつ異文を手がかりに、最初は四首であったものが推敲過程で八首構成の連作に仕立てられたことを論じ、人麻呂の作歌の方法を考察している。

第五節「人に恋ふる歌」は、人麻呂歌集の相聞の歌群を取り上げ、そこには相聞本来の男女相互の歌と共に、男女が一方的に相手を求める恋（孤悲）の歌の存することの意味を、人麻呂が相聞歌に新しい時代性を盛り、相聞歌を新しくしようとしたことを示すものだ、と論じている。

第六節「盛期萬葉の一側面」は、人麻呂とはやや違った場で歌を作った高市黒人の、主としてその旅情を詠んだ歌を検討して、そこに家持などの後期万葉へと向かう契機や傾向を認めたものである。

第三章「後期萬葉の歌人と表現」は、旅人・家持を論じて、後期の歌の当面する問題を論じている。

第一節「旅人〈吉野讃歌〉の位置」は、吉野讃歌が漢語「天地長久」に拠り聖武帝と吉野を賛美する表

現構造をもつことに、漢詩文に頼って和歌を作るこの時期の和歌停滞の傾向を指摘したものである。

第二節「旅人の漢風の遊び」は、旅人の「讃酒歌十三首」を、「濁れる酒」「賢良」という漢語に基づく用語を手がかりに、旅人の歌の漢籍受容の様相を論じている。

第三節「大伴旅人の歌境」は、「亡妻挽歌」十三首の論で、その異文の考察から、この歌群の推敲過程を検討し、晩年の旅人が到達した歌境を論じたものである。

第四節「家持と〈山柿之門〉」は、家持が和歌の先達とする「山柿」が、柿本人麻呂をさすとする立場から、この語に籠められている家持の古典主義志向の立場を読みとろうとする論である。

第五節「家持の選択」は、家持が万葉集第二部編纂に部立てを設けず、第一部の天皇中心の編纂理念を放棄して、歌の私的な視点を重視する立場から和歌を考えようとしていることを論じている。

第六節「歌主の変容」は、家持や周辺歌人の「歌主」を仮設して詠む歌を考察したものである。

第七節「^{ついで}付合いの文芸の源流」は、家持と尼の合作歌に後世の連歌付合いの原型を認めた論である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、次の研究段階を模索している万葉研究の現状において、訓詁注釈という文学研究の正統的な方法を継承し整備徹底することで、より深く新しい視座を拓いたものとして高く評価できる。論者の訓詁注釈を徹底しようとする方法が、依然として万葉研究の有効な本道であることは、本論文にうかがわれる新鮮な問題意識と、そこから結実してきた多くの新知見とによってよく示されている。

第一章は、人麻呂の歌を万葉集の頂点とする立場から、それ以前の歌を、共同体的な歌謡から個の表現を模索して「文芸」へと成立してゆく過渡期と位置づけているが、その結論を歌の用語・語句・文脈の構成など、もっぱら表現の分析検討により示したことが大きな特色である。この初期万葉の諸論は、従来の理解を一段と深め得たものと高く評価できる。本章では、文字化された「歌謡」の言語的特徴などの基本概念の説明に簡略なところがあり、「代作」の問題など、本論文が立論に採用している従来の諸説について、その採用の理由や根拠などの検討がまま省略されているために、その立論の適切性を判断しにくいところもあるが、全体としてその論証は精緻で説得的であり、論旨の展開も明確である。

第二章「盛期萬葉の歌人と表現」では、特に第一節の人麻呂が「ワレ」を「吾等」と表記することの意味を問題にした論は、従来漠然と「宮廷歌人」といわれていた人麻呂を、具体的に人麻呂の表記法から、「宮廷歌人」の内容の一面を明確に証明し、人麻呂の歌の本質に深く迫った論として高く評価される。この論の提起する問題は大きく、一般に歌がいまだ音声により享受されていたらしい人麻呂の時代に、この表記はどういう意味をもったのか、当時の言語における文字の機能は何であったか、人麻呂の個において「われら」と区別されるその奥の「われ」とは何か、など多岐にわたる重要な新しい問題をもたらしている。第二章は、全体として人麻呂の歌の方法がいかに当時の歌を新しくし、また新しくするについて意欲的であったかを中心に論じているが、本章は従来の人麻呂論を一步深め得たと認められる。

第三章は旅人・家持を中心に、衰退期に入った和歌が、漢詩文の援用や歌の日常語化などにより新境地を拓こうとしたとする立場から後期万葉を論じていて、その問題意識は妥当と認められる。ただ家持については言及すべき問題が多く残されており、それは今後の課題であろう。ここでは膨大な漢籍を博搜して示された用例、歌の言語の緻密な分析手法や論理構成に、論者の学識の深さがよくうかがわれる。

本論文は、蓄積の多い万葉研究史をよく整理し継承しながら、全体として従来の研究段階を確実に前進させたものと認められ、その成果は高く評価できる。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。